にもかかわらず
風土を紡ぐ地球展

「にもかかわらず」（Dennoch）という英雄的な回答を与える者は、まったく希望のない状況からなんらかの救いになるものを取り出してくる。

エドゥアルト・シュプランガー

にもかかわらず　風土を紡ぐ 地球展

開催延期

十握 周作（陶芸家）／山口 和也（美術家）／上村 利子（おばあちゃん）with 三村 豊（研究者）

二〇二〇年二月二十八日（金）〜三月一日（日）十時－十六時

主催：総合地球環境学研究所　博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業
　　民の世界－大学と地域の連携による記憶・技術・風土の継承（代表 三村豊）
共催：京都精華大学　アフリカ・アジア現代文化研究センター（設立準備室）
協賛：フィールドソサイエティー
協力：法然院

風土たる軌跡

二〇二〇年二月二十五日、展覧会を延期することにしました。にもかかわらず、私たちには決定的なことが強固なものとして顕われたのです。

展覧会は、陶芸家の十握周作、美術家の山口和也、高知県の集落で暮らすおばあちゃんの上村利子、この三人の地球への眼差しを展示する初の企画でした。しかし、世界中で猛威をふるう新型コロナウイルスの状況が日々変化し、先の見通しが立たない状況が続いていたことから、展覧会の実施可否を判断しなければなりませんでした。私たちは、ソーシャルメディアのテレビ電話で話し合い、開催するかにあたって意見が衝突し、本音で激しくぶつかり合いました。このやりとりがあったからこそ、この展覧会で仕掛けようとしていた想いが顕著に示されたのだと思います。それは、この展覧会では、同じ風景を見た感覚や共に過ごした時間、そうしたつながりによって育まれた軌跡を伝えたかったことです。私たちにとって、このつながりが風土たる軌跡として作品や空間を成立させていたのです。

私たちは、本来であれば法然院で展覧会を実施する三日間を別の形で一緒に過ごすことにしました。改めて誰のための展覧会であったのか。そして、何を伝えようとしていたのか。そのために何をすべきなのか。私たちは、行動を共にし、そこでの対話を記録して冊子として残すことにしました。

この展覧会では、「環境から風土を作り出した私たちが、風土からより良い環境を作り出していく」ことを目指しています。つまり、こうした状況下においても、より良いアイディアを導き出し、楽しめることが大切なことだと思っています。さまざまな考えを共有しながら学び、「地球展」という軌跡から新たな発見をもたらす機会となれば幸いです。

これからの「風土」とは何か

日本の思想史家、哲学者である和辻哲郎は、『風土　人間学的考察』において、風土が単なる自然環境（ある土地の気候や地形、地質、景観）だけではなく、人間活動（歴史や文化、宗教、芸術）における個人／集団の精神構造を認識する方法として風土論を提唱しています。和辻の風土論以降、さまざまな解釈がされるなか、地理学者のオギュスタン・ベルクは、自然環境と人間活動が相互に影響を与える「通態性」という捉え方を提言します。この捉え方には、本来意図していない悪影響も含まれ、この影響が現在の地球環境システムを大きく改変しているのです。その背景には、産業革命以降の生活環境が大きく変化したことに由来します。

世界人口は七十七億人（二〇一九年）とされています。その半数以上の人口が都市に暮らしています。都市での暮らしは、医療や教育、情報、娯楽などの機会を増やし、経済の発展をもたらしました。同時に、都市で暮らす人々にとって自然は遠い存在へと変化していきました。今後、都市人口が増え続けるなかで自然環境と人間活動の相互作用によって育まれる風土は、どのようにして育んでいけるのでしょうか。そのときの「自然」や「環境」とは、何を指しているのでしょうか。

地球展では、風土の捉え方を問い続けるとともに、これからの風土とは何か、について考え続けていきたいと思います。その先には、もしかするとこれまでとは異なった価値観や自然観によって新しい風土が育まれるのかもしれません。風土の理解はとても難解ですが、まずは、自分にとっての「風土」を探り、その風土からより良い環境づくりを考える糸口になれば幸いです。

総合地球環境学研究所　三村 豊

十握周作（陶芸家）

いつも通り
にもかかわらず
いつも新しく
ここは　山門
〜入口
　にもかかわらず
出口〜
足跡を　とりあえずつけていく
やがて　それが　繰り返されることで
道になる
一期一会の新陳代謝の場
その手で
うつわに
お花をひとつ
挿して
一緒に　つくりましょう

表　にもかかわらず　裏

十握「にもかかわらず」というタイトルに対して、ネガティブをポジティブにするというイメージで、やっていけたら面白いなと思った。

法然院で山門周辺の階段を使いたいと感じたのは、そこが出入り口で、入ったときは何もなくて、帰るときにかたちになっているということをやってみたかったから。

来場者が山門を通って花を入れ、帰るときに自分の入れた花を見ながら帰る。展覧会を見に来た人とともに、展覧会を仕上げていくような。誰でもできること、みんなで共有してもらえる場所になる。あとは、片づけやすく、広げやすく、そしてみんなが壊さないようなものをと思って作った。

「空花」Ku-ka
一億年のキャンバスへ、今という閃光を走らせた

山口和也（美術家）

瞬間の彼方には永遠があって
ぼくはその永遠を描写する

絵画点火式 奉納

日本で唯一の紙祖神を祀る岡太神社・大瀧神社の千三百年大祭・御神忌で執り行われた「絵画点火式 奉納」は、花火を用いた独自の手法によって「永遠に咲く 瞬間の花」が描かれた

山口　兵庫県の高砂市に一億年前の火山活動でできた竜山石というのがあって、赤、青、黄色の三色ある魅力的な石なんですが、大きな岩山に発破を仕掛けて採るんですね。ぼくはその割れたてほやほやの竜山石の断面に惹かれています。一億年、寝てたかどうかわかりませんが、突然叩き起こされて令和の空気に驚いたのか、ぼくにはその断面がざわざわと発光しているように感じるんです。

「空花」はその一億年という光のキャンバスへ「今」という閃光を走らせた作品。そして同じく高砂の山々を歩いて採取した土に、竜山石を原料に作った釉薬をかけ、松を燃料にして穴窯で

A piece of the universe　紙を漉くところから、その制作がはじまる

高砂焼　絵画となんら変わらないアプローチだという茶碗

焚いた茶碗を「高砂焼」と名付けました。この茶碗は本展で初めて発表する予定だったんです。こうした素材の採取から自らの手で行うようになったのは、三年前に発表した作品“A piece of the universe”から。こちらは石川県の山へ入って採取した野生の雁皮とその山の湧水のみを原料として紙を漉くことから制作をはじめ、特製の花火を用いて「今」という瞬間の痕跡をつけて仕上げてあります。

「地球展」はぼくに、自身のルーツである高砂の風土とこれまで以上にしっかりと対話する機会を与えてくれました。限られた高砂の大地から生み出すことを前提にしたのはなにも制限を設けたかったからでなく、「永遠性」への原石が自らの足下にあるということを無意識下の道標が指し示してくれたから。それは自身の血と向き合う事なく成し得ないということです。じつは昨日（三月十七日）も発破があって採石所で過ごしました。足下の地球がドンっと揺れたあと、一億年前からタイムスリップしてきた「空花」のためのキャンバスと、これまで焼いたことのない新しい土と出会えました。それはすっと地に足がついて何かが満ちていくようなそんな時間でした。

上村利子（おばあちゃん）・三村 豊（研究者）

それはひとりのおばあちゃんの物語
急勾配の山のなか
先祖代々が作り上げてきた集落
平均年齢七十五歳
限界集落と呼ばれ、山も人も集落も老いてゆく
にもかかわらず
いつも元気になるのはなぜだろうか
「あたりまえ」に深さがある
一人の研究者を通じて
人と人とがつながり、新たなものが生まれる
邂逅する風土のカタチ

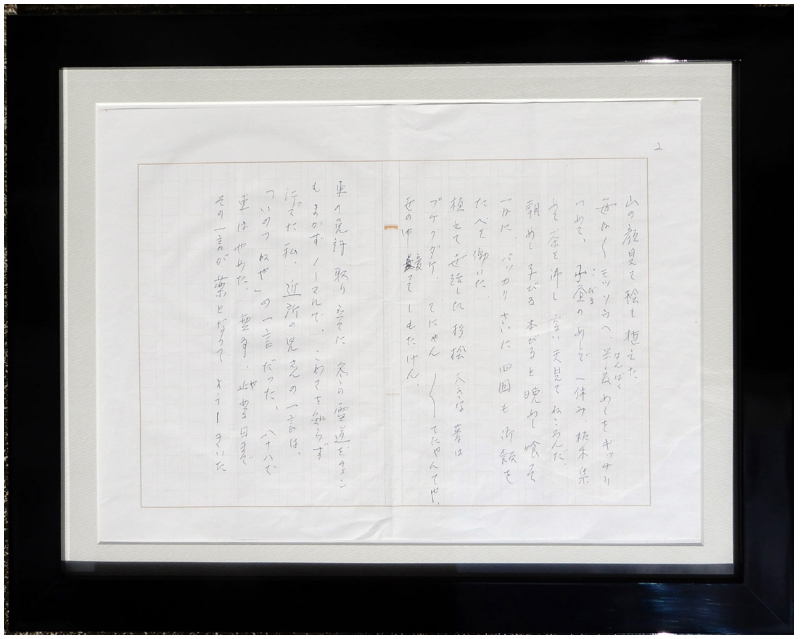
用箋挟のシートには、素材、場所、時間、名前が書かれており、
素材と素材のつながりには、関わった人々がつながり、その痕
跡が交わることで風土のカタチとなってゆく

山口さんが山へ入って採取した雁皮を原料とする和紙に利子さんが言葉と絵を描く

三村　記録がないということは、たとえば、そこに暮らしている人たちが都市へ移動したり、亡くなってしまったりして、そこで育まれた暮らしの知恵や文化が、どんどん消滅していってしまう。

　高知県の大豊町にある怒田（ぬた）集落では、会話のなかであたりまえのように使われている屋号や天候の見極め方などの知恵を聞き取る調査をしました。記録するだけだと面白くないから、その記録を唄にしようとなって、二〇一八年にはいくつかの唄を作ったんです。集落の記憶を記録しながら唄にしていくなかで、利子さんは、自分が見てきた集落の暮らしを詞にして、ぼくらに渡してくれたんです。

　作品を作るというのは、芸術家だけができることではなく、もしくは風土を研究するということは、研究者だけが考えることではない。利子さんの言葉は、違った目線で作品、芸術、アートというものを捉えることができるでしょうし、風土を捉えることができる。この展覧会に向けてそれぞれが話し合ったことは、各々の価値観を捉え直すような、そういった相互作用が見えないところでもあったんではないかなと思っています。



怒田集落で暮らす上村利子さんが書いた詞には、方言や屋号、子育てをする母としての想いが綴られている

延期 にもかかわらず 展覧会を語る

十握周作・山口和也・三村豊

開催延期の看板

法然院の山門

十握 今回は曖昧なものではなかったんや。

山口 そうしたくなかってん。十分その可能性はあってんけど。

十握 そう。あったけど、飛び込んだのよ。

山口 そこは疑ってたわけ。三村さんを疑っているというよりも、信用する要素が別になかったから。面白い展覧会になるなんて簡単に思わんようにしてたから。

三村 展覧会は、作品を見せるだけじゃなくて、どういう空間を作っていくかというような話を良く山口さんがされていました。今回、延期になってしまった「にもかかわらず　風土を紡ぐ　地球展」が、ぼくらにとってどういうものだったのか。

　展覧会の準備として、石川県の金沢と高知県の集落を訪問した。金沢では土を採集して焼き物を作ったり、ぼくが研究活動している高知の集落に行って、利子さんと話したりして、二人とはかなり話し合ったと思う。この展覧会を開催するにあたって、どういうことをやりたいのかっていうのは、話し合いのなかで作っていこうと思っていた。

十握 ここならできるとか、ここじゃないとだめだという場所は、そうないと思うんや。自分がまずやりたいことが決まっとるから、それをやるために、与えられた場所で何を精いっぱいやるか。逆に言えば、ぼくなんかそういうとこに委ねたいところもある。そのとき考えるっていう。

金沢で土と出会う

周の窯にて
（右から十握、三村、山口）

山口 どんな展覧会でも、作品そのものに重きを置いて考える人が多いけど、やっぱり人間ってそう単純じゃなくて。そこに行くまでの道のりであったり、まず展示空間に入ったときの空気感があって、においや温度とかも全部含めて、向き合うわけやから、「地球展」もやるならその部分をちゃんと仕立てあげたいなというのは最初からあった。

十握 場の雰囲気はやっぱり必要。展覧会の会場も含めて作品にしないと、伝えたいものが伝える場にならんのじゃないかな。

山口 それは来場者に対してもそうなんやけど、その前にその空間を一緒に作るメンバー間の作用がじつは大切やと思う。間合いに生まれる微妙な振動のようなものかもしれへんけど、それがちょっと変化することで何かが大きく変わったり、その波動がまた何かを増殖させるような。

三村 それは双方向な感じで、見せる側／見る側にアクションとフィードバックがあって……

山口 場合によっては違和感もあるわけ。双方向とはものとものとの間、関係性の話。たとえば、十握さんと三村さんの関係性があって、ぼくと三村さんの関係性、十握さんとぼくの関係性がそれぞれある。三村さんていう人はどう、十握さんはどう、山口はどうっていうふうに、その単体を誰もが同じように認識してるってことはない。世の中のすべては関係性で成り立ってるとすら思ってる。

利子さんに雁皮の採集の様子を説明する（右の写真が実際の様子）

その関係性から見えてくるもんでこの展覧会が組み上がったらと思ってたんやけど、簡単ちゃうやん。誰もまとめてくれる人おらへんし。なのでどんな角度からこのメンバーを見せたら納得できるかというのをいつも考えてたよ。

十握 そう。場を作るっていうのは、お茶飲むのと一緒でね。喉が渇いたからお茶を飲むというだけじゃなくて、お茶を飲むことで潤すのは、喉かっていうところを考えなければならない。

山口 結局そういう調整ができないまま「みんなで展示をやりますんでよろしく」みたいな妥協だけはしたくなかったからね。なんでこのメンバーでやるのかっていう意味が見えへんかったら、俺は気持ち悪うなる。だからグループ展というのは基本的に嫌いなんよ、あまりやりたくない。でもなんか面白くなってきたんよね。金沢や高知で一緒に過ごした時間はおっきいし、あれがあったから面白くなっていった。そのような作り方をしたのは初めてかも。最終的にはなんとか良い展覧会にしたいって思えてた。

十握 待ち遠しい、楽しみな形になったからね。で、ましてや、広めたくなったもんな。作品を広げる展覧会じゃなくて、この集まりを広げたくなったかな。ただ、この集まりによって作品が仕上がっていく面白さは、今回すごくあった。こういう枠があったからこそ、結構準備ができたかな。野放しにされたわけじゃないんやが、結構自由にさせてもらった。でもその自由感がなければ、たぶん展覧会をするっていうことにはならんかったかもしれんな。「あれやって、これやって」って言われたら、誰

座談会の様子

高砂焼の撮影

の展覧会やってなってたかもしれん。振り返ると、出会いのなかでつないでいく方法と、こういうことを伝えていきたいから、こういう場もあるという、その両方があんのかな。

山口 変に混じり合うんじゃなくって、それぞれの立体感を保ちながらね。形も固さも違うもんを持ち寄るわけやけど、別々に陳列しても変やし、雑多に混ざっちゃってもね。やっぱりどんな立体を作るか。

十握 おそらく地球展とは、そういうとこやな。

三村 十握さんが平面的に整理し、山口さんが立体的にまとめる。素晴らしいですね。やはり、十握さんと山口さんは、ちゃんと各々の信念に根付いている。十握さんの場合は土との関わりが焼き物にもにじみ出ていて、見る人にも伝わると思う。山口さんの場合、最初に会ったときの直感はあったけどわかりにくさがあった。話していくなかで、作品や空間の作り方、何かを決断する際にブレがないんですよね。たぶん、それは、十握さんとは違った根付き方をしている。利子さんも違う。三人は、いったい何に根付いているのか。これが、風土の捉え方ともつながってくると思っている。さらに、今回の展覧会では、「風土を紡ぐ」という副題があって、来場者には作品を見て、肌で感じてほしかった。展覧会が延期になったのが本当に残念です。

二〇二〇年三月一日　地球研　叡月台にて

十握 周作（とつか しゅうさく）／陶芸家
金沢市の泉野櫻木神社境内でアトリエ「周の窯」を開窯そこらへんの土石や身近なものをつかい素朴で、そのくせ、くせのあるいかにも十握式で、十握的なやきものを制作する。

山口 和也（やまぐち かずや）／美術家
発光する瞬間の痕跡、またはその集積によって永遠性を描く。一人の音楽家との即興で描かれる "KAKIAIKKO" で 、2000 年 TAMON 賞グランプリを受賞。近年は特製花火を用いた独自の描画手法で、観音寺本堂の天井画「鳳凰図」、大徳寺真珠庵本堂の襖絵「空花」などを描く。

上村 利子（かみむら としこ）／おばあちゃん
高知県長岡郡大豊町の集落に暮らすおばあちゃん。

三村 豊（みむら ゆたか）／研究者
総合地球環境学研究所・研究員。専門は建築学（建築史・都市史）。都市と農村で持続可能な住まい方の研究を行う。

にもかかわらず　風土を紡ぐ　地球展　創刊号
2020 年 3 月発行
編著者　三村豊
表紙デザイン　和出伸一
発行者　総合地球環境学研究所